芳晴閒雙玉傳

第三集

五

へ13
2898
15ヒ

文久二年 皆月長江屋 摂津国 [illegible]

四谷 尾定 帳書

近世新話雲晴間雙玉傳第三輯巻之五　播陽　宮田南北編次

第二十九回　淡河定範天神山の城を攻る

其時大將小貝瀬話四郎は轎の中より轉び出る。女とやあらん引起させ。そゞ容貌と遂と見るふ色白く目秀。二十三四の美女なりゝれば心の内大よろこび。吾今朝より金まれ米まれ得ると呼ん妻ゝれども。只得ざるは衒妻あり。しふ今恁る美人と得ゝ。誰欲有這女と。再び這轎に乗ら。後陣の方へ贈りおけよ。今今宵より妻ゝて。二世も三世も見棄まじと。下知する辞に土兵們は泣叫

ぶ那女と。莫理ふ轎ふ乗〜つ。後陣の方へ贈り行〜ふ。這時〜も阿足厚太ハ。土冠等と激〜〜。這所迫來り〜ぶ。那轎を見るよりも何者あるぞと引留〜ろう。轎を舁〜。五兵們ハ。脆てヤやう。這轎の内あるハ一名の女あり。小貝瀬話四郎主の仰ふよつて。後陣まで贈りひあり。阿足厚太怒て曰やう軍中ふ於て女と奪ふハ。緩々と〜ろる動情うふ。頭領行龍主の聽ふ達せば。返て大ひある罪と得べ〜。其女ハ追かへ〜ろ。但〜一刀ふ斬弃て。綽手短ふするあそ好ゑれやよ其女と引出せ。一刀ふ試べ〜と。罵りあぐ〜。下知されば轎と舁〜る五兵ハ。やむ事を得ず轎と弃て又先鋒へぞ向ひろう。登時〜も阿足厚太ハ。氷のごとき白刃と拔持轎のやろうふ立向ひ。大音ふ罵り云やう。やあ妻早く出よ。阿足厚太が手料理と。喰〜て冥土へ遣すべ〜。覚悟せよやと喚りあぐ〜。轎の牽戸と丁ど蹋放〜。女の首筋提握。既ふ一突ふせんと為ろ〜ぶ。初て那女と見るふ容貌尤美麗ふ〜て。亞流希ある形姿風流阿足厚太ハ突かけ〜る。刀とやもう地ふ投棄。寛尓と笑ふくヤやうあハ女中ふそありつるぞ。吾今一刀ふ斬んと曰〜ハ。和女郎とハ知ざるゆへあり。命ハ扶け与ふべ〜。今より吾淋ぐヤ呼ふ。一点も逆く事あろれ〜〜まこと一点ぞろうも逆あべ。這細首ハ骸ふ附まぐ〜。心と定めて答とせずやと。液あぐ〜て語奇〜ろる。勢ひ又是異ふ〜て。見苦〜ろ〜事ありろう。恁る呼へ小貝瀬話四郎。飛ぐ〜ふ走り來つ阿足厚太

門へ13
號2898
卷15

ぶ那女を。威〜かけ〜を見るようも。怒氣心頭より発り来り。大音ふ喚
てり曰やう。其女ハ某乙ぶ。毫由縁の有者ゆ。後陣まで贈り遣〜
るるふ。何ゆ人半途ふ〜掠奪〜。吾隊の者を追う〜。女を執て肆
ふ闕東西とハあ〜るぞ。早く這方へうもべ〜と。喚てり曰ハ阿足
厚太ハ。瀬話四郎を叱つ〜曰やう。汝と吾とハ日比より。水と魚との交り
あり。非除這女ぶ開方の。由縁ふもせよ妻ふもせよ。某乙ぶ毫闕〜
ると。飽まで吾を罵りつ。掠奪せ〜とハ何事ぞ。某乙今這女を犯〜
と曰ふもあ〜ず。女ハ這儘うへもべ〜。今某乙と罵りる。汝ぶ越度
を侘言〜て。快く誤言と。曰ハ瀬話四郎大ふ怒り。ゆ〜大胆ぶ
阿足厚太。汝肆ふ吾女を慰〜。剰某乙ふ誤言とハ。忍びぐ〜かる一言

う。汝ぶ某乙ふ罪を侘て立去よと。曰ふ阿足ハ大ふ〜う。女をハ
〜与んと〜ふ。尚かよう〜と。髯鳴すハ。吾を軽んじ思ふゆ〜。
宇薙殿より指圖あ〜ハ。吾ハ這隊の大将軍。汝ハ即副将あり。
此ゆ人ふ先鋒ふすく〜。某乙ハ後よりすむ。副将の身ふて大将軍
の。辞ふ逆ふハ大罪あり。法ふよ〜罪を正〜士卒の内へ追落〜。
湯焚の職とあすべ〜と曰ハ。瀬話四郎怒ふ堪ぞ。曰〜ておけば聴弄
かぐき大言を吐者う。開義あ〜べ今這里ふく。汝と結果那女を誘
引て。何國へあ〜ても逃走う。快く一生を送り。富家の老翁とあるよ
そよそれ。覚悟せよやと罵あぐう。刀を振て斬て蒐まべ。阿足厚太
も抜合〜。互ふ一足も引ぐ引あと。七七四十九ふ戦ふ〜う。是を見

このく城をとりうえんさくせんとせるなり
悪代官ぬくのあくぬけ
賊首行龍天神山の城を據る

水滸傳ニ武太郎ガ妻潘金蓮ヲ殺シテ那女ヲ記セル段ヲ

這時ノ乱ニ小貝瀬話四郎ガ奪ヒ那女ハ土冠ノ為ニ討ヒ又了ヒ其のちと聽セ給ヒ

て這隊の土冠們猛可ニ大ニ騒ぎ出し。上と下へとかくへと呼へ姫府の小寺何某よりも。指向らきる討手の兵三千ばかり出來り。思いかけあき土冠の兵と。四方よりあつ取囲こ。鳥銃と打ち什唱喝と発しぐつと喚く蒐立まぐ。土冠の大勢大ひに狼狽。敦ガ一名も戦えんとする者なく。四方へ走り八方ニ散じ。這里ニくい討き那里ニても生捕き。這時月の陰さえく。隈なく照らす十三夜の。空ニ閃ゆる動哭の声十面ニかまびすく。最哀きみも物冷うう。阿足厚太小貝瀬話郎の両名ハ。這時まだも戦ひ居こうぶ。阿足ぐいらつく討込太刀と瀬話四郎受こんじ。真甲丁ど斬割き後へどうど倒るゝ呼とたく懸と阿足厚太ハ。難あく小貝と打取こうされども土冠們大ニ散じ今ハ身一ツニあくれハ。宇薙ガ隊へ加ちんと途を求て走りるぐ小寺家の討兵ニ囲き命限りニ戦ふこれども。力盡て生捕きハ宇薙ニ付従ふる土兵ども。這体を見るよりも。又大ニ騒ぎ出し。早拔々ニ落行者あり。宇薙ハ大ニ憤きて。恁てハ味方の難義あるべし。非除阿足小貝の両名ハ。破きくくて何やらの夏欲あらん。三木ニハ猶両頭領の大兵あり。且時援兵来るべし。心と静やく討兵ニ當り早く姫府と襲取両頭領の賞錢ニ預きずやくと下知されども。土冠ハ猶色めき立て。隊もさらニ定まらず。恁る所へ討手の大兵克ニのくくるいきおひあく。真直闇ニ討て蒐きぶ。何ぐ以てくるべき。恐地ニ討破らきぐさんぐニ成くく逃くくく。宇薙ハ大ニ憤り逃る味

方ふ目もかけぞ。群り來る敵ふ當り半時ばかりふ戦ひしぶ逆も
克べき夏ふあらんとぞ思ひしが。敗ハ易く生ハ難し。
面あれども立ちくり。両頭領の御目ふかりよりとやと其上で進
退と究やんと。只一騎ふて川筋と三里ばかり駈ふ在縡と
閉バ両頭領も。敵の計ふ當りまひ敗軍あらしと聽ふ無念さ口
べらもあるものらしいよく馬の蹄と早め。密原村まで引へりふ
早合戦の最中ふて。味方の大敗軍とハあるね。徒てハ巽主の御身の上
も。心元ふ思ふものらし。敵の中と馳通り。這里や那里と鞭ふ
ちらしずも途中ふ出合。鬼や角とする内ふ又御行衛と見失ひ。
不題夫よりも思案ふ天神山へ退んと。一方と打破りふ。敵より放
つ征箭ふ當らぬ。薄手少々負ふれども。捐一方と切拔ふ。惜ふハ乗
ふる馬と。弓鳥銃ふ打倒され。歩行立ふてあるふるあり。夫
よりも喘ぎ這所まで。のがれ來つ。ちらずも両頭領や及我渾
夫ふ知遇せ。ふまぐ運命の盡ざる所ふ。不題あらまへ徒のと
ありと。遺ふ語り行ぶふ。三名ハ這と閉毎ふ。嘆息せざるふ
あるとなり。去程ふ四名の者ハ。夜とともふ跨と急ぎ十四日の朝未
明ふ天神山ふ歸着せ。初より這所ふのらしおきふる土冠と共
ふ。倭儸三百許人。猶城塁と守りて居ふ。一揆勢の破きて
と。閉より城中猛可ふ騒き出し。上と下へと周章し。土冠等
ハ夜の内ふ皆拔々ふ城と逃出。跡ふのらし者とて。ふ倭儸三百許

人々ゝ〳〵〳〵て居〳〵〳〵所へ四名の頭領〳〵り來つ首言城中へ入々れば二百許名の小倭儸少〳〵心安堵〳〵れども。三木の敗軍と委く聽て恐懼ざるハあり〳〵〳〵。登時〳〵も行龍ハ。猛可ふ下知と傳へて曰ふ。別所家の討兵不時ふ大挙〳〵て。這所へ來るべし。准構あるハあるべ〳〵ず。富民と犯〳〵そ得〳〵る所の。金銀ハ多〳〵れども。米穀ハ運送拿ふ便のよろ〳〵かゝらぬもあり〳〵て。大半途中ふ弃置〳〵〳〵れば。今さら運送拿さるふ。百姓既ふ逃去〳〵れば。いゝんともせんとすべあ〳〵。今這城ふ貯へ〳〵るハ。一年の准構あ〳〵。是の〳〵心元あ〳〵思へど籠城せでいゝふふまゞ。僥倖ふ〳〵て這城の要害好ゝと好運あり。即剋士卒の隊配せんゝて。大手の門ハ行龍自是と守り。東門と鯰江ふ守らせ西門ハ巽女ふ守ら〳〵ゝ搦手ハ宇薙ふ守らせ。手配既ふ定り〳〵れば軍勢と分ち遣し。豫て蒲上ハ反謀の志あり。是ゆへ箭玉大木大石の貯充多〳〵り〳〵れば各々十分の准構とあ〳〵。敵の來るを待居〳〵り。去程ふ別所殿ハ智臣ある。淡河彈正定範ハ惣軍都こて五千許人十三夜の亭子頃ふ大村峠と打立て。天神山へ発向ゝ〳〵る。軍卒よく法と守り。整〳〵〳〵て隊乱ゝ手ず。田園畠地と荒ゝ支ず。十四日の己の時頃ふ〳〵〳〵天神山ふ着ゝ〳〵り。豫て斥候と以て見せ〳〵ゝ〳〵ゝ賊兵早〳〵〳〵城ふ〳〵〳〵ふ勢あ〳〵ゝも要害ふ據這首と大支と固〳〵〳〵れば。容易ふ落城せ〳〵きよ〳〵と。早〳〵も後陣ふ告〳〵〳〵れば。淡河彈正定範ハ自馬と乘〳〵〳〵。仰で城の体と見るふ。四門嚴ふ〳〵て城樓高く岨ち。切岸斜了

聳て。鑿りて削おゝるごとく。墨々たる築堀岸上ゝ横り。堙深ふして潭水藍のごゝ。數百流の旗指物と。所々ゝ推立て。秋風ゝ飜り。矢間々々のあひざより。鳥銃を出したる。胡国の城の固ゝ似たり。淡河弾正ハ稍久しく打仰で居たりしが。再び馬を中軍へ乗入諸士ゝ向て宣ふやう。賊塁の要害固ふして。尋常ゝ陷りがたし。首言試ゝ責て見よとて。猛可ゝ諸軍を激して堀際近く責よせたり。然して淡河弾正ハ再味方の士卒を制し。馬を軍前ゝ駈出し。大音ゝ喚て曰やう。別所家の討兵の大将淡河弾正定範大軍ゝ向ふて。城中の大將蛟倉行竜主と。一言の曰べき事あり。早く出よと喚たりければ。這時蛟倉行龍ハ城楼ゝ顕れ出右ゝ巽あり左ゝ鯰江あり。行竜ハ床机ゝかけ右の手ゝ采配ゝ寄て寛然として城下を見下し。大音ゝ應て曰やう。寄手の大將淡河弾正定範主とハ。吾ゝ曰べき言あるとハ。何事ぞや曰聽んと。大声ゝ喚たりければ。淡河弾正應て曰やう。和主ハ當城の守將。今回一揆ゝ兵を起せし。蛟倉行竜とハ和郎あるや。見ざる年さ最若う某ごとても今茲まゝ廿年未滿の者あれども。国守ようもあらじゝ思う。今回の討兵ゝ向ふて。吾試ゝ一言を曰ん。夫兵凶器ゝ是を動さゞるこゝ必ず害あり。和郎陣平ゞ美壯と無周勃の才を いゞき。天下ゝ明士多しとゝいへども。及一等を勝ずんや。芳名を帛竹ゝのこさを支を思ず。臭を万世ゝ流さんとを是愚の甚しきゝあら

ざるや這故に天に逆ふ者はあらじ。天に順ふ者は昌ふ。和郎大平の虚に
のつて。蒲上ゞ玄に困じらる。蒼生の民を毀ひ城を屠り地を掠め奴ふる
人の名器を砕き号ふる義兵と称す。這そも〳〵何の謂ぞ。或は曰是
天命に逆ふあり。因て一拳に勢挫じけ。金銀を以てあづけらる。二
万許人と聽へらる。百姓忽離散して。正に獨夫の名を做せり。是其
行ひ美あらざるあり。今這孤城に掬篭り。墨中の兵一旅に過きず
譬へ蟷螂の斧を執て。立らる車に向ふに似たり。我君別所長則公。甲
兵十万大将千員。皆是才畧大智あり。吾們のごき者は屑斗ゞ
如く。其數あけてかぞへがたし。拿に足らざる某乙ふさへ忽ち破られ
勢ひあんぞ怯きや。今吾属下に五千の精兵あり。勢ひに乗て責立

あべ。孤城忽地微塵とあるべし。怎る危ふき竜城して。其身を誤う人
と損ひ悪名を残さんよりは城を開て降りあべよろしく主君へ聽へあげ。
當城の主も。執立て得さすべし。是非を吠して應をせよと譬へ
かうよ喚そうそれば。行竜呵々と打ひ。徐に主ある別所殿へ内欲
ヌーて外仁義を施さず。是を世に英雄と称す是を汝が主あり
る。別所殿のごふ不際凡を中興の人君に然らざる支至つて鮮し。
竟あり舜あり禹く湯く文也武也是們へ則無欲者あり。自餘の賢
主へ則よく。己に克欲を窒にする者く。舟の小白桓公晋の重耳文公吾邦
ふくへ頼朝叅時。時頼等の徒内則欲多ふして外に深く仁義を
施さ。所謂欲とへ酒と色と貨宝あり宮室と旋畋あり。或へ書藝圖

畫〳〵て是を以て文と為或へ開土闢遠是を以て武と為と或り傍と崇尚〳〵て是を以て清と為其余義時尊氏義滿們の徒ハ論ずるハ足らざる罪人あり。汝恁のごとき君を以て。仁心とするハ何支そ吾兵二百ハ足らねども。又よく汝ら五千余人と。防ぎ破るハ足らざる支あり〳〵快く責蒐れ吾又快く防べし。首言試ハ吾一石を受て見ゆやと曰より早く一ツの石を拿出し〳〵弾正ら目眉を當ハ兵ら打うと手中の早業定範をろさず身を かゝぜべ。後ハ控し〳〵旗持ち胸板丁ら打あて。そらまくかゝと倒るハれべ人諸共ハ那旗も地上ハどふど倒るろう。城中より是と見て。一度ハどっとさゝひろれべ。弾正定範大ハ怒り者侶すゝと下知すれべ五千許人の寄手の大軍一斉ハ責かゝる。四七廿八ハ責上るべ城中這里と破らもと〳〵。必死ハ為て戦へべ寄手大軍ありといへども。城の要害堅固ハて。容易ハ責落ち支あらぬ。結句失傷の者多く。登日へ軍を止ハろう。這日を始〳〵て。毎日々々責られども。城中さらハ弱し体あり。却て城中より夜討朝かけ〳〵て。寄手の兵と悩〳〵られべ弾正定範諸軍ハ下知〳〵て。責口と毫し退け固く守つゝ控へろう

第卅回　妖賊當滅大團圓

這首ハ且く前文と休題て。摸刀兵庫の里あり。檜垣屋舟十郎ハ勘當〳〵る楫五郎去日浪華の女肆ハおひく。池垣貢ハ殺されろと聽よりも又今更ハ楫五郎の最不便ハも。可愛さへ恩愛のあるゝ者さ

悄々地ふ楫五郎ぞ追福と。余處あぐらふいとあるゝふ及楫五郎と親〻と
る池垣貢の最憎されべその行衛や那ぞ素性と人知まず鞫問ふふ那
池垣貢といふへ。實へ蛟倉紫它二郎と喚做ふる。公廳の穿鑿者と聽
いよ〳〵不便ふ思ひ。一日妻ある鼓子花ふ向て曰やう。嚮ふへ一時の怒み
任し。楫五郎と勘當せゝふ那心根のよるゝかゝねべ。天然の罰と蒙
り。人手ふかゝて死ぬさと閉て嘆くへ愚痴ふ似られど。不仁ある兒ぞ愛と
世の常言ふ曰ふる通り。今さらゝ一入不便ふあるねど及雄龍丸の名刀へ。
楫五郎ぞ盗出し。今へ那行竜とやらの手ふあるよし。楫五郎ぞ後世
の為や。且へ名刀穿鑿の為西国三十三ケ所の觀音菩薩と順拜せん。
汝へ家ふ止りて。娘小舟と養育し。家と全ふ立べゝと曰べ鼓子花

涙と流し。あへ恨めゝき哀宜ふとの〻。楫五郎の支へゝも。其凶問就
聽よりも。涙の干く間さへあきぬ中 ゝて吾洲とのこゝ。楫五郎の
追福ふ。獨り逆旅ふ行ふとへ。世ふ隅あるあふせの。小舟へ今茲十一歳
ゝ。等筆もゝ人ふ越ゝう。主管擢六へ忠義の者あり。那ふ小舟ぞ
身の上へ遺あゝも託ゝおき。吾洲ふ倡ふ順禮ふ出こ行こと本意
あるこ這義と赦させるへやと。繼子と思ふ真心の。誠面ふ顯れゝ。及
止べゝもあゝざれバ舟十郎且ゝ。ゝび且嘆じて中やへ。汝ぞ心ふ感じ
よゝ。最貞信ありと思ひ。ふ世ふあゝぐゝき今回の真心。嬉しさへ又十
鏡顯と跡ゝ拜ぬもゝ。心ふ感嘆ゝゝゝゝ。近きふ逆旅立せんと欲
も。心の准構せゝれよと曰バ鼓子花よゝこびて。倡ふ准構とまゝゝ。

清水圓通靈驗図

三日ざろう経るうち。准構全く調つて且黄道吉日みく　延旅立ハ又
好日あまべ。一家の奴婢們と残らずあつめ。綽云云と告知らしつ且一
門の親類家へ。豫てより知しあまべ。這日皆々餞別の准構しつ門辺
遥ふ目送りそ。這日ハ七月初三日みく。稍涼風あぞ迎へみろう。夫
よりして船十郎と。鼓子花の両名ハ。摂品大和山城河内紀品濃州若品
丹後等の諸国と打めぐり。轉して播品へ出ろう頃ハ九月みぞ及び
ろう。這首ふ播州東北の一隅ふある清水寺の観世音ハ霊験ゑ炳然ふ
まべ。首言清水寺へ詣ろう。這日ハ九月十三日みく。北山里の冷氣強
く。夕みハ北風と送り。且ハ霜と結ぶ樹の巣も稍黄ろ落てきら
ふ雁の来ると催せう。這時舟十郎ヤ。ゆう。這里よりハ古郷あつ庵

べハ遠くもあしねど。三十三ケ所の霊場と遺あく巡り果るまでハ。
古郷へハかへりぐろうう。今日ハまぐ日の早うれども。元より去向
と急ぐね身あまべ。今宵ハ這里の観音さまふ。通夜して幹ぶ冥
福と。営んこそよろべしとて。登日ハ這里ふ歌客ろう。時ふ人追々
ふ走り来つ。天神山の邊より。猛可ふ騒動起りしそ。其色ハ云云と。初
鮫倉紫它三郎ぶ。百姓と集し次第より。天神山の城と奪取且数千
人の百姓侶と。集めるよしと取々ふ云あくりて。這清水寺ぶぞも賊
軍来り。乱妨ふも及ぶらんと。上と下へと動轉するを。船十郎ハ打驚て其頭
領の姓名ハ心がけと思ひふれば去ぬ体ふくよしと問ふ打さとぐろう。
中あまべども。田舎人の信心あれば其大將ハ恁々あり。其起りハ云云と

閉こゝる儘と物譚まゝ舟十郎心驚き。妻皷子花ハ悄々地ハ曰やう今回一揆の頭領ハ。俺們が鞠求る。池垣貢と喚做こゝる。曲者の實名ハ。鼓倉行竜ハ疑ひあり。天下ハ同名異人あまゝ。年まゝ若き者と閉べつよ〳〵那奴ハ違ひあり。噫恐ろ〳〵き曲者うゝ。怎る大謀あり行龍あまゝ吾兒の仇とかゝとハ思ひもよ〳〵ず。雄龍丸の名刀も再び手ハ入支難〳〵と妻皷子花も諸侶ハ嘆息の外あゝゝゝ。鬼うくする内ハ日西山ハかゝゝ入て。十三日の月出こゝ。怎る所へ又追々ハ人来ゝ。一揆の兵ハ皆悉く。南とさゝて発向せゝ。這地へハ来ゝまゝと。告こゝゝれば一山の沙門〳〵ハ案堵とまゝゝゝ。舟十郎と皷子花ハ。偖前ハ坐〳〵ゝ。観音の名号と称へ。夜もすゝゝ寝も

やゝず。既ハ夏満の比ハ。ゝゝ秋の夜の短こゝゝ。旅の労のあまゝあらねば。寝ゝもあゝ〳〵間眠こゝる。其時〳〵もあゝ〳〵不測や。猛可ハ殿内白日のごゝく金色の光り八方ハ徹〳〵見る〳〵御戸帳左右ハ排き大六の観世音。忽然こゝゝと出させる。一千八百の菩薩達何ゝも妙ある光明を放ち。御影あゝゝハ顕まゝ。舟十郎と皷子花ハ思ゝず知らず地ハひれふゝ。あつと感声涙と侶ハ尊さ云ひもあゝゝゝ。其時〳〵も観世音ハ微妙の声ハて宜ハやゝ好ゝ。よハゝ汝達夫婦楫五郎ゝ為ハ仇と鞠。且皷子花ゝ貞心あハ世ハ最希ある婦人ゝ。後世天堂ハ生と得人支疑ひあり。汝達夫婦ゝ切ゝ志ハこゝゝ雄龍丸の名刀ハ近きハ再び手ハ入こゝ。それのゝやゝで

今回の賊鮫倉夫婦と亡さんハ。你達夫婦ハ命ぜべし。心と決して
賊塁ハ行よ。神変不測の扶あり。一時ハ大功と達すべし。登時ハ
雄龍のこゝろ。雌竜の刀も手ハ入べし。今回の妖賊鮫倉夫婦ハ尋
常の者ハあらず。其因縁と閉をべし。心と徐て遂と閉よ。什麽那
鮫倉行龍と。巽女の両名ハ尋常の人閲あらず。原這當郡ある天神
山ハ幾年の星霜と累ゝ。雌雄二の大蛇の霊人這也人ハ那両名ハ其
心掘て淫あり。僂ぶ十八年。天文元年の其頃ハ雌竜ハ小蛇ハ変じる
ハ兒の為ハ殺されゝ。其怨魂の生を来しゝ。即今の巽あり。然を
ども那雌龍と殺さゝるゝ。太平二。その故ハ巽と生を。悄々ハ害
と残せゝ故我子の夏より太平二ハ家さ人身さ人亡びゝゝ自と還る

恨の悪執因果のあせゝ夏とハの人ど。太平二ハ玄悪と。天の悪ませのハ所も
又あきと曰べゝゝず。憐むべきハ藤波あり。妖婦の為ハ大変と告て万民
の命と救ひ。其身白刃ハ伏ゝるあり。予も是と憐むべハ。諸菩薩と
談じ天堂へ救ひ得ゝゝ。又そぶ雄竜ハ三年嚮。別所家より天神山ハ
猛可ハ幕将あゝゝとき。三木の藩中ハ忠義ハ名高き。名古十郎
忠邦ハ。箭先ハかゝゝ忽地ハ亡び失ゝゝ其悪魂の行龍ハ附纏りて影ハ添
形ハそゝゝ。神通自在と得ゝゝ。此故ハ行竜ハ。隙てより別所
と亡し。天神山ハ焚殺されゝゝ。悪とあさんと思ひしゝゝ。種々と
手と改て。今回一揆の乱と起し。恠騒動ハ及びしゝ。まゝそぶ上ハ執
祟も。名古十郎忠邦ハ。切腹させゝも其實ハ。雄龍の悪執のあせゝ所く

然ハあるとても妖賊ど。命數近ふせまつゝう。吾今一ツの法符と与んこれと以て城ふ入べ。賊の妖術行されど。忽自滅ふ及ぶべし。那尚後生と悟らず〜て。悪念と滅せずば。永く畜生道と脱がゝ〜。若まゝ自後生を怕ま。我と一回願念せば。忽地邪道の苦と脱。霊魂永〜傍化と得く忽ち浄土へ生と得べし。你努々是と忘ど。妖賊退治とちゝるべ〜。二賊全く化道せば。其功まず〜大あるべ〜。即法符と遞与べ〜と尊くも御手づゝ。一ツの宝符と授るひ。徐々として御戸帳へ入らせるゝと見へゝるゞ。異香馥都と四方ふ薫じ。形へ見へざりまゝと思へ夢へ覚ゝ。舟十郎と皷子花へ夢覚て四下と見るふ果〜て一ツの宝符あり。二名感涙止あへど。偖二日三日清水寺の。観音堂ゝ

通夜と〜て天神山のゆうすと閃ふ妖賊既ふ城ふ篭り三木勢いろふ責ま〜ども。賊兵強ふ〜て城陷ど。寄手難義ふ及んぐゝと聽ようも舟十郎夫婦の者へ。那宝符と首ふうけ天神山の拳ふ陣せ〜。淀河弾正定範の陣屋へこゝへ至りゝり。時ふ陣門と固めゝる將校舟十郎們夫婦と見て叱罵りて喚ゝるゆう。大胆ある順礼ども。這里とゝるある所と思ふ。大將軍の本陣あるど。下れ〜と罵ゝると舟十郎們へ毫も恐まど押て軍門ふ入んとすると。將校大ふ憤り棒と以て打せへんとすると。舟十郎へひるまず去らず。大音ふ呼ぶゝ云やう。俺們へ順礼あまども。天神山の妖賊と亡さべき計あゝて。ゝるぎ〜推參せど。大將軍ふ見ゆべ〜と。喚ゝけ〜ゝんぐゝ。弾正定範是と聞て。

自轅門まで出て來つ。舟十郎夫婦を見て。最いぶかしく思へども引て中陣ふ入り。其來歴を鞫問らふ。舟十郎ハ小膝を進めふ声ふあり て清水寺の觀音菩薩の夐告あり〳〵夏より。行竜巽ゞ前生迄 菩薩の告を遺もあり〳〵語りられば弾正ハ是を聽嘆息する夏大うと あらず。即時両名を客座ふ直〳〵。饗應をゞやふかをりをり登時 〳〵も舟十郎ハ。定範ふ打向ひ。小可願くハ是より直ふ城中ふ參る べし〳〵這義とのるさせをりふやと。尤られば。定範ハ大ふよろこび。即時 ふ小太郎を召出〳〵。和王ハ行龍巽女們ゞ一面と見知られば某ゞよ りその使者とあり。伴ふ城中へ至るべし〳〵。尚觀音の告のごく。妖賊 忽地罪ふ伏〳〵あべ。狼烟とあげて合図とせよ。我早速ふ入城す

べし。是即懐中ふ所持をる火筒あるべ。是を以て合図とせよとそ。 拿出〳〵て与られば。舟十郎ハ大ふよろこび名古小太郎と僅ふ三 人やゞて城門ふ趣きつ。寄手よりの使者と喚をりられば。門を 守る小倭儸這由を両頭領ふ告をりをり且くして召入をり。 去やゞふ三人ハ賊の小卒ふ譬固をりまつ。正堂近く進をりるゞ。 行竜巽ハ小太郎と見をりをり早速座を設け。殿の上へ誘引をり。 行竜ハ舟十郎們夫婦と見て思ひゞけあと夏あるべ。怪然と て大ふ驚きをり。さすゞハ行竜毫ともさらゞど。両名とも坐上 ふ迎へ珍〳〵や檜垣屋王御夫婦。我ハ池垣貞く去年兵庫ふくハ。 さまゞくの紹介を得て。満足今ふ堪ざをりるゞ。先以て方々の無

支と見て喜び是ふまるのあしと曰へば舟十郎ヤやう某乙と
ても同じく支あり。池垣主の尊顔と見しへ尤不勝の喜悦あり。
聽ば不測の立身せられ羨しく存ぜし史。ようぎく訪ひヤせ
ありと互ふ辞譲と盡しそう。登時名古小太郎へ行竜ふ向ひて云
やう。某乙當城へ參りしへ今回の大将彈正主より私の使く豫て
某乙御身と一面の交あり。西の宮浦の危急。割田五太平を討下
されしへ身ふうへてのよろこびあり。吾その恩を思ふ史降參と
勸んるめ。悄々地ふ這里へ入城せう。と云せもあへど行竜へ呵々と
笑ふくヤやう。吾降參とまるやどあしへ這期までい待べきや。也し
軍利あしずべ城ふよつく死人のく。降參あどくへ思ひもよらず。

いへへ舟十郎ヤ やう。途達両名のうふ云とも。今生の命既ふ近し。期
ふ及んぐ迷ととう。天命を知らずして人の命と拿んとまるやや。
罵り云べ行竜巽へ舟十郎とそうくくと睨く。汝老耄吾這鉄壁城中
へ獨身ふく入來り。俺們と罵ふ飛で火ふ入蛾虫の其身の焚くと
知らざるう。某乙近頃得くうくく劔あり。長居いくさべ一分試ふ刀の
斬味試むべく。早出去よと喚ちまべ。舟十郎へ毫も恐をず吾
其劔と求んくうう。偖こそ諸國とやどるく你いつそや浪花ふおひて吾
躰ある揖五郎と。討て其時奪拿し。雄龍丸の名刀と。這方へ遣ふせ
早ちくせとひるまず去らず詰寄まべ。行竜へ面倒ありと雄龍の
名刀拔放し。切く蒐と小太郎忠孝大胆ありと。支るを巽もやうし雌

ぶん正
小きく

竜の刀を。さらりと拔て両方より。舟十郎と皷子花ふ討て蒐り
有さまハ。實ふ是雌雄の猛虎の。老ふる羊を駈ごく。最危ふくぞ見
へくりゝ。登時しも舟十郎ハ。首ふかけくる觀音の宝符を手早く
取出し。南無觀世音々々々と。夥回称名し。眼よりも高くさし上
て。二名が前ふ指付まぶ。あゝ不測や行竜巽ハ身心猛可ふ悩乱し一
足も進ゝ得ぞ。後の方へ逃去とのがすまじと小太郎ハ刀拔めち立
向ふ。登時手早く舟十郎ハ懐中煙烟とどふと挙まぶ。程もあらせず
大手より。冷河弾正定範諸軍を率し入來まぶ。行竜巽ハ前後を囲
まれ。鯰江宇雄ハ何處ふあるや。出合ゆと嗅ちれば心得くると濡九郎
宇雄も共倡手勢を率し。冷河弾正定範が。兵卒ふ討て蒐を定範

すらず味方を下知して。皆悉く生捕ろう。鯰江宇雄ハ後ろう道と
求めく逃んとすると援並仲之進名古小太郎。両方より飛かゝり押
て縄をどかけくりゝ。行龍巽ハ是を見て。咒文を称へ形を匿し。
逃んとすふ忽然と眼くらんで術行ハまぶ。大地ふどくと打伏く。
悩まて辞ハあくりゝ。其時舟十郎ハ二名ふ向ひ。你達両名這期
ふ及び亦脱まんとて脱まハせまじ。小可這里ふく你達が因縁を説
聽さんくりゝふ聽ねと嗅ゝ。那清水寺ふ通夜せし時。菩薩の夢
夢と蒙りし支行竜巽三名ふ前生の支と。遺もあく語り聽しれ
べ両名ハ大ふ驚嘆して。さりふ首と得もあげどさし低て辞あし。
舟十郎及曰ゝ。其上ふ猶菩薩の告あり。你達恁ても自悟せず。尚

衆人の命を拿んと。執崇思そぐ幾世経しも。畜生道へ脱しがたし。
自天命と観悟しと。菩薩の慈眼ふ観念し。今生捕まし二百許
人の。小倭儷の命ふかくり。凄く自刃ふ伏し。永く悪念をひるがへさず。
蚍道と脱するのくあらず。天堂ふ生と得べし。這即観世音の夢うり
告させるふ疑ふ支と止て。死と凄くせようと。勧る辞ふ
行竜巽腰ふ帯くる二振の名刀前ふさし出し。和主ぐ尋る雌雄の釵
へ即這一口あり。今既ふ観音の尊き利益と蒙りて。悪念とみふ悟脱せう
やよ洛河弾正ぬし。今こと俺們両名ぐ。閻浮ふくる時来まり。願ふ俺
們ぐ首級ふくし。二百許人の属下の者の命と助けあらば凄く自
刃伏と。別所殿の子々孫々守りの神とあり待らん。這義やいふと

尋さべ。定範大ふ感じ入。天晴ある両名ぐ願。鬼神横道あるとぐ。頓
の離念満足せり。属下の命ハ助る間。心のときぐ如と急げ。と曰ふ二
人ハ大ふよろこび。刀と拔て行竜ハ。腰へぐきと突通せば。巽も刀と拔
放し。咽のやとりへ突立つ。ぐ苦しむ断末命。行竜ハ首ふ付
る。那名玉と拿出し。這玉ハ浮世ふありてさしふ益ある東西ふ
らず。再び天へ返さべしと。呼ぐり那玉と。虚空へ投ぐり
上さべ。紫雲ふ地を霞ふ匿て。行衛も知きずあり。登時し
も両名の。瘋口より陰々と。烟のごとく顕を出る二ツの蛟竜。虚空
飛めぐる支二三匹。時ふ何處ともあく。一条の紫雲。鬚来り二ツの
蛟竜虚空ふ合し。忽菩薩の形とあり。西の空へと去るふ尊さ白べ

もあらざりけるまゝ。両名は逸ふ手と合し。拜むず這世のいとまゞ
ひ。その儘息は絶ふるる。舟十郎と皷子花は両名ず頓ふ自刄せしと
見。且観世音の奇特と見て。思そず両名ず死體ふ拿付。声と拳て
ぞ泣しゆるる。去程ふ両賊亡び。土冠全く治りられば。定範下知
して城と壊らせ舟十郎皷子花。鯰江宇薙登它二百許名の生
捕。且雄竜丸雌竜丸の両刀共倡すぐさま三木へ引連来り。定範
上へ言上して。二百許名の賊們は悉く命と助るり。鯰江宇薙は
大罪あまたども。格別の恩赦ふ預り夫婦共倡遠く隠岐の国へ
流されるず。両名終ふ出家して。行竜巽ず亡後と吊ひ。善人と
なりたはりぬ。偖舟十郎ふは雄龍雌竜両刀と賜り。且三木殿へ出

入とゆるされ。其家益々富さかへる。這回土冠早速ふ退散せしは諸士
の戦功とそげしふよりあるとて。いづれも賞と賜り。就中小太郎
は竜一名ふ大学と討取し支莫大の功あるとて。父の家督ふ
一千貫加増あり。大夫の末座ふ加へらまるる。恣て別所家繁栄せ
しは目出たしし支ふるるる。嚮ふ天朝へ献ぜし玉行竜巽
ず切腹せし同日同刻紫震殿より飛出て。忽地虚空へのがりる
あそ。不測あまた
南北曰く這書專ら童蒙の為ふ勧善懲悪の一助ともあまた
かしと欲し播地ふ一揆の起りし次第と。十五巻ふあるこ
とと。文最つたあるふ似られども。及爾戯ふ備ふのみあり。就中

這書中ハ土冠と顕〜土兵と称〜一揆と書〜賊兵と喚〜
こゝ。皆是筆勢ふるものあるべ。看者誹謗もるとやゆ
よ。とゝいふ

雙玉傳第三集末回大團圓止於筆爰

女訓姿見　女訓躾種　全一冊　鳴渚菴先生述

鳴渚菴先生ハ心学を世に高唱し此女訓ハ女子
七才より十二才までの内小もの心得べき事を第一に教
て淫婪姑父母夫小姑（若員の通称）奴婢を慈
愛し節儉を守り操を正しくすることを深く教し平相
性者を名といふ。賢女貞婦の術とおぼえべき
婚礼の式作法をと青つ引新婦衣服を著ることを
男女相性名頃字使し抑人生の中年の
交婚二十六歳の歳訓年その外女子は養こゝろ
教ケ条を鳴渚先生ふるくむ式を矢細抵とを八

妻くおりくに従ふ事なり。文を読み学ぶ事
大学小学を学ばしめ。婦女の義則は海内無雙
の書。幼稚より一代の事跡を授さしめ。後世の母は師と
雷とたべしを婦徳と備へる。大ひに有益の書なり

心學五則

全壹冊　藤田柳湖先生作

人倫は心法なり。持敬積紀和合終始長者へ五則と
いふ。学ばざれば是を知る事なし。故に先生五則の
人たるの実を平易にして和解し男女貴賤とすべき
仁義の道を知る。自ら質素節儉を旨とし出世すると
高尚にして。世上を比ひ出す事なし

釋尊御一代記圖會

全部六冊

浪華　山田意齋叟參考
前北齋老人圖画

釋迦如来の御父浄飯大王の御即位と發端とし橋曇彌摩耶両夫人の胎内
如来摩耶夫人の胎内に生と託し事橋曇彌夫人摩耶と嫉て胎内の
王子の出生を妨んと道師に呪詛せしむる條如来夢中の説法母の子息
と説く。夏浄飯王藍毘尼園に花の宴を催し悉達太子誕生の奇瑞
悉達太子御幼稚より菩提心を發し謂釈迦提婆遺恨の始悉達太
子宮中を出て檀特雪山に難行し正覚成道して出山し衆生を済度
する。夏迦葉舎利弗目蓮及諸羅漢佛弟子成和解耶悉陀羅女の貞心
提婆が十悪須達月蓋両長者の信心流離王の暴悪釈尊法華入滅五鉢
神力涅槃像の欠まで都て如来御一代の事を記し圖を加る雖有讀本也

浪花　好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

全部十冊近刻

此書ハ天智天皇の御宇小百濟國へ緩の兵を遣されし吏を首とし～逆大臣ゞ燈臺鬼と成～謂大伴真鳥兄と計ら～家國を押領せ～奸悪大友白王子淨見原天皇と御合戰の次第金道の生立白虫大鳥の忠義雅明ゞ義心真鳥の奢侵金道万苦を凌て文乃仇を復～本領を安堵せ～迫の奇妻を洩さず死せ～実録なれ多編夫～小説と如へ善と勧め悪を懲と使ゝと面白き新本也

同上

扶桑皇統記圖會

全部十冊近刻

此書ハ人皇四十代天武天皇の御治世より六十代醍醐天皇の御宇迄の公事の根元宮廷寺院の草創代々の人物の行条と死を所謂役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明皇后良弁僧正弓削道鏡恵見押勝中将姫傳教大師弘法大師田村丸浦嶋が子小野篁在原行平業平小野小町僧正遍照菅丞相其外古人の実傳を探ゞ精く輯録～悉く圖画と加～重宮の書く

そもく茶の味茶ハ小児病を患者のみ用ゆる茶昔より世の中ふ多くとゝ人ハ唯賞翫するのもかり医者ハ既ゝその意味を知て病ふさう苦ることまんのもかり医者ハ既ゝこの茶法ゆ浅ゝ細よりして小児科を業とし種々の物茶を調へて憶茶の小児の病ひを治らる種浚すこなり其中ふ日本の保赤圓も他家ふ小児類の良茶にて小児教命の最第一とし此茶ハ茶の食物或茶ふさ合ふく小児病の法なりさるべきつ茶の効切なるこ此茶ハ茶の方のれ公傳ふ小児方の苦痛を除んと願ふなり

第一　かんぺきゆふ

▲よゝ祝いうむ▲かゝご子見冷ちゞへ▲そらをえんめ▲蟲ふ物ふ小ぶ▲ちく紙ふ▲子見ゝ泣くと物ゝ▲そ茶ふ

▲ひ茶ふ▲ちゝ▲きれりくゝ▲めとちゝひゝ▲すゝ

▲ゝ▲ゝ▲ゝ▲ゝ▲ゝ▲ゝ▲ゝ▲ゝ

食